

| | |
|--------------|---|
| Title | シモーヌ・ヴェーユ : その自由観と現代文明批判 |
| Author(s) | 宮川, 文子 |
| Citation | Gallia. 1978, 17, p. 22-28 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/9842 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

シモーヌ・ヴェーユ

— その自由観と現代文明批判 —

宮 川 文 子

シモーヌ・ヴェーユが、自分の生きた時代について語る時、そこにたえず強い危機意識が働いているのが感じられる。確かに彼女が生きた時代は、ロシア革命の変貌や人民戦線の崩壊に続き、ファシズムの脅威が全ヨーロッパにのしかかり、人間の自由を願う人々にとって絶望すべき材料には事欠かなかった。しかし、常に明晰であろうと努力し物事の原理を追求していった彼女が、単に目前の社会・政治現象に対してだけ危機意識を抱いていたとは考えられない。それはもっと深いところに根ざすもの、即ちこのような現象を生み出した背後にあるものへの疑問に根ざしていると思われる。具体的に言うと、権力の集中化や独裁者を出現させたものが、人間の権力志向性にあるとしても、それを許した精神性こそ問われるべきだと彼女は考えているように思われるのである。では彼女の関心を捕えたその精神性とは、一体どのようなものであったろうか。ある時代の精神性とは、その時代の文明によって培われる。従って、シモーヌ・ヴェーユも現代文明における精神性を特に問題にしたものと思われる。そこで本論では、現代文明に対するシモーヌ・ヴェーユの見解を明らかにしてみたいと思う。その場合に前提として、彼女がどのような人間理解に立って文明を見ていたのか知ることが大切である。そのために本論では、まずシモーヌ・ヴェーユの自由観をみることで彼女の人間に対する基本的な考え方を明かにし、次に現代文明に対する彼女の見解を考察しようと思う。ただし現代文明と言っても範囲が広いので、本論では科学と歴史とをとりあげ、それらに対する彼女の考え方を探ることにする。

I. 自由観

シモーヌ・ヴェーユの初期の師であるアランは、道徳の原理を「義務、よりも「意欲、あるいは「意志、におき、¹⁾ それが自由につながると考えていた。これは人間の思考や行為の基準を、外からの義務＝外在的なものよりも、内なる内在的なものにおき、本能的な欲望や情念から解放された意欲・意志こそ自由の源泉とする考え方である。シモーヌ・ヴェーユはこの考えを受けつぎ、さらに深めながら人間の理解に努め、文明の問題を考えた。まずシモーヌ・ヴェーユの人間理解についてみよう。

アランは、欲望や情念を制御することが自由の条件であるとみなしていたが、この考え

方は、人間のおかれた状況を明瞭に把握することにより成り立つ。というのは、人間のおかれた状況が、情念や欲望に基づくものか、あるいは他の要因によるものかをまず明らかにすることが前提として必要だからである。そのまず明らかにすべき状況とは、人間は欲望や情念とは無関係な必然性の支配を受けているという事実である。だから、いくら人が欲望や情念の解放を理想に掲げても、結局必然性により阻止・制限されることになるのである。

シモーヌ・ヴェーユは、必然性に支配される人間の状況に注目し、欲望や情念から解放されたところの自由という考え方をさらに進め、自由を必然性との関係により規定しようとした。即ち、

「生ける人間は、いかなる場合にも絶対に曲げられない必然性によって、四方八方からとり囲まれているのを止めることはできない。しかし人間は思惟するので、必然性が外部から彼に押しつける拍車に盲目的に従うか、人間が必然性について描く内部の表象に自己を適合させるかの間で選択をする。そしてここにこそ、隷従と自由との対立が存在する」²⁾

と考えている。この自由は、二つの契機からなっている。一つは、人間が注意深い思惟により必然性を洞察し、それに基づいて確定系を自己に与えることである。この確定系とは、人がゲームをする場合に、いくつかの規則によって限定された世界を自らに与えるように、世界の中で行動する場合、人がその行動に課せられる諸条件を整理し、自ら定めた規則と組み合わせることにより設定する限定された世界のことである。他の一つは、設定された確定系を行動の指針としてそれに自己を適応させることである。シモーヌ・ヴェーユが理想として規定した自由は、人間の二つの能力を駆使することにより得られるものである。それは思惟する能力と、行動を思惟に服従させる能力であり、彼女はこの能力にこそ人間の尊厳性が認められ得ると考えている。結局、シモーヌ・ヴェーユにとって理想の自由とは、対象の把握や行動においてたえず思惟が働くことにあり、自由と思惟能力とは密接につながっている。

ところで自由には、もう一つの側面がある。アランは、意志・意欲を道德の原理としていたが、この考え方の根底には、意欲や意志と善の希求とを同一視する見解が含まれている。人間の内なるものは善を希求しており、それを認めることが意欲することであり、道德的行為の源泉なのである。従って、アランにとって人間が悪を意欲することはあり得ず、ただ自己の内なる善の希求を認めるか認めないかによって、つまり意欲するか否かによって、人間が義しくある可能性が決定されるのである。

シモーヌ・ヴェーユはこの考え方を受けつぎ、自由と徳とを結びつけて理解している。

道德的な行為は、自由な予期されない行為である。それは、自分自身に忠実で純粹な行為に他ならない。³⁾

彼女の考えでは、善行とは本能的な欲望や情念や気まぐれや想像とは無関係な、心の奥底の希求につき動かされてなされるものであり、人が外的基準を用いてあらかじめ理解し

た上でなすものではないのである。従って自由であるとは、人間に内在する純粋な希求、即ち善への希求を含み、道徳と密接な関係を持つのである。

ここで、シモーヌ・ヴェーユの理想とする自由を総合的に整理してみよう。彼女においては、自由を実現する過程において、認識と道徳とが分かち難く結びついている。つまり必然性を思惟することが、人に悪の可能性を斥けさせ、その精神を浄化し、自己の内なる純粋な希求に覚めさせる契機となっているのである。そしてまた、人間の尊厳性を、思惟することに置いたシモーヌ・ヴェーユの真意もここにある。それは、思惟することが精神の浄化をもたらすことで、道徳的行為になり得るからである。これが彼女の理想とする自由であり、人間の尊厳性である。彼女は、この人間理解を出発点に、現代の学問や宗教についても考察したのである。

II. 現代文明批判

Iでみたように、シモーヌ・ヴェーユの理想とする自由は、必然性の認識によって成立するのであるが、必然性を理解し確定系を設定するにあたっては、諸科学が重要な役割を持つてくる。その中でも特に、自然科学は、あらゆる現象を通して自然の諸力を支配している法則を把握する学問として、彼女は早くからその重要性を意識していた。1930年に提出したエコール・ノルマルの卒業論文で、デカルトの科学をとりあげたのはその関心のあらわれであった。⁴⁾ しかし間もなく1932年頃から、シモーヌ・ヴェーユにおいては現代科学に対する疑問が現われ始め、1935年にはデカルトに対し、一部批判的な見方がなされるようになった。⁵⁾ こうした一連の疑問を通して、彼女は近代科学の研究に没頭し、自己の疑問に対する解答を見つけ出そうとした。そこで、シモーヌ・ヴェーユの近代科学に対する見解をみていくことにしよう。

科学について考察する場合、シモーヌ・ヴェーユは、研究の志向性とそれに基づいてなされる対象の設定の仕方とを明確にすることにより、各理論をその発生の根源において緻密に検討し、その基盤や限界を明らかにしようと努めている。彼女の分析によると、ルネサンス以後、科学は、人間の欲望を実現するために、自然を方法的に支配することを志向してきた。そしてそのために、物質が服している必然性を研究の対象とし、世界を認識しようと試みた。世界を説明するにあたって、科学者は、欲望を実現する行為と考えられる労働を原理として選び、労働に課せられる諸条件により世界を表象しようとした。その結果、労働の観念から直接派生してくるエネルギーの観念と、エネルギー現象が不可逆であることを示すエントロピーの観念が得られた。シモーヌ・ヴェーユは、これら二つの観念を、それによって世界の現象の中に数学的關係に類似した関係を読みとることが可能になったとし、一応古典科学の業績と認めている。しかし同時に、彼女は古典科学にも限界があることを見抜き、次のように批判している。

古典科学の限界は、その志向性から由来するものであるが、シモーヌ・ヴェーユによる

と、それが如実に現われるのは、その世界像においてである。つまり古典科学は、世界を人間が欲望を充足するために行動する仕事場、としてしかとらえていないのである。彼女は、その点を鋭く追求して、「古典科学は、部分的にしか宇宙を説明していない。古典科学が描く宇宙は奴隷の宇宙である。……世界の再構成にあたって最も基本的な労働、奴隷の労働を原理とするからである」⁶⁾ と言う。実際、古典科学の世界像は、実在のそれとは大きな隔差を持っている。それが表象するのは、力を唯一の支配者とする無味乾燥な世界であり、人間が世界に対して抱く心情とは相容れないものである。彼女は、純粋な正義を求める人間の内なる心情は、宇宙の諸現実の一つであり、古典科学はその現実を無視して自らの真理性を誇っていると、きびしく批判する。

もし力が絶対的に支配者ならば、正義は絶対的に非現実である。しかし力は支配者ではない。われわれは、このことを経験によって知っている。そして正義は、人間の心情の内奥に宿る現実である。……だとすれば、誤っているのは科学のほうである。⁷⁾ 彼女は、古典科学が、部分的に世界を解明し真理の断片を得たにすぎないのに、それをもって全面的真理としてしまったことに強く抗議し、さらにそのため、人々の心に悪い影響をもたらしたと指摘する。それは、科学の世界観が人々の心に、心情の希求よりも力を正しいとみなす傾向を植えたことである。またこの世界観は、理性により正義や平等を求めようとするユマニズムに反し、現代の道徳的頹廃をもたらす要因になったのである。彼女は、特にヒトラーをあげ、彼の『わが闘争』には科学の世界観が申し分なく表わされており、⁸⁾ 科学はヒトラーのような人物を生み出す素地となっていると、激しい口調で論じている。

彼女の指摘を待つまでもなく、古典科学は、その原理である労働の単純化による自然現象の説明のため、部分的な世界像しかとらえることができず、ゆきづまり状態に陥った。他方それと平行して、19世紀末から20世紀初頭にかけては、X線の発見を皮切りに、電子や原子核の発見が相つぎ、それらを踏まえて相対性原理や量子論などの新しい見解が現われ、科学は、新たな展開をみせる。それは、今まで物質の実体を表わすのに、単なる仮定の存在としてとどまっていた原子の存在が、実在となったことであり、巨視的物体が原子からつくられていることが、実験的に明らかにされたことである。こうして、古典科学の時代は終わり、新たに現代科学の時代に入ったのである。

シモーヌ・ヴェーユは、この今世紀初頭からの現代科学に対して、科学は意味を失ったときびしく批判する。今世紀初頭というのは、アインシュタインの相対性理論やプランクの量子仮説が誕生した時期であり、これらの理論により物理学は新しい時代に入ったと言われている。特に量子論は、自然界に非連続性と確率的性格とを見出し、科学史を一新する画期的なものとして評価されている。その量子論をシモーヌ・ヴェーユは、批判の対象としているのであり、批判の理由は、プランクの公式が理性にとって何の意味も持っていないからだと言うのである。彼女の考えでは、科学において得られた公式は、実際の世界

と類比関係を持つべきであり、そのことが理性によって明瞭に把握されねばならないのだが、プランクの公式は世界と類比関係を持っているとは認められないのである。実際、エネルギーに一種の不連続性を認めるプランクの考えは、エネルギーを連続であるとする従来の物理学と鋭く対立している。

このような事態が生じた原因を究明するため、シモーヌ・ヴェーユは、古典科学との関係において現代科学の性格の明確化を試みている。それによると、現代科学は古典科学と同じ志向性を持ちながら、古典科学から原理そのものを除去してしまった。そのために、世界の必然性という実在の対象を失い、かわって実験の結果得られた代数式を対象にするようになった。そしてその結果、実在の世界とどんな関係を持っているのか理解できない公式が生み出されたと言うのである。シモーヌ・ヴェーユは、この公式に意味が見出されない限り、科学はもはや本来の意味を持っているとは言えないと考えている。

というのは、この公式の正当性は、応用面で実際効果があることにより承認されただけで、純粹に理論的な思弁により検証されたわけではないからである。つまりこのことは、科学が本来使命としていた、理論的に厳密に世界を解明することを放棄し、二義的位置にあった技術的応用を第一の任務とすることになったことを意味している。そのためにこの公式を用いる人は、それが何を意味するのか理解せずに、期待された目的に達するために盲目的・無自覚的に従うことを余儀なくされる。シモーヌ・ヴェーユは、これを現代科学の危機ととらえ、現代科学は人間の自由を実現するどころか、かえって知的荒廃をもたらしたときびしく追求するのである。この知的荒廃は例えば、行動の領域において、スローガンになった内容のない言葉に人々がふりまわされるという傾向に示されていると彼女は考えている。⁹⁾

この知的荒廃をもたらした、現代科学の危機の打開策として、彼女は、現代科学が獲得した理論を古典科学のそれとの相対性においてとらえ、できるだけ後者に還元することを主張する。このことは、かならずしも彼女が、古典科学への復帰を望んでいることを意味しているわけではない。彼女のいう還元とは、現代科学の理論を古典科学のとらえた必然性によってとらえ直すことを意味している。それにより、現代科学は思惟により理解可能なものになると、彼女は見通しているのである。

以上述べたシモーヌ・ヴェーユの科学批判をまとめてみよう。

古典科学は、それが原理とした労働を単純化しすぎたきらいはあるが、思惟により世界の必然性を解読しようとする試みにより、人間の自由の要求に答えるものであり、その点で評価される。彼女にとって人間にふさわしい自由は、必然性の洞察・認識とそれに基づく行動にあるからである。しかしこの科学は、知性を誠実に行使し、自らの対象とする世界の限界をはっきり認識し得なかったため、心情の希求を排除することになったが、この点はきびしく批判される。これに対し現代科学は、抽象的な記号を研究対象としているため、その理論を理解しようとする人間に、何ら内容ある説明をなし得ず、人間の知的混乱を招

きその自由を奪う傾向があると糾弾される。

シモーヌ・ヴェーユは、科学の批判・分析を通して、真理として受け入れられない世界観や、意味の明快でない理論が生まれた背景を浮きぼりにし、知的誠実さが充分に行使されていない点を明らかにした。同じ視点に立ち、彼女は他の学問についても言及しているが、そのうち特に重要なのは、歴史についてであると思われる。そこで、この学問に対する彼女の見解を明らかにしてみよう。

歴史は資料の上に成り立つ学問であり、歴史家は資料を前にして、実証的な基礎を欠く仮説をつつしみながらその時代を解釈する。しかしシモーヌ・ヴェーユは、資料自体がすでに権力の手垢のついたものだとみなしている。

そもそも事物の本性上、資料は権力者や征服者のところから出る。¹⁰

大部分の資料が、権力を掌握したもののところから来るとすれば、その時代に対する歴史家の見解は、その時代の勝利者の展望と大きく変わらないことになる。もちろんそこに現代の価値観が入り、過去は相対的に評価され位置づけられはする。しかしそれも、勝利者の見解に対する現代の側からの価値判断ということになってしまう。かくて、

歴史の中では敗者は注意力から逃れてしまう。歴史は、動植物の生命を支配する進化論よりも、もっと非情な進化論の牙城である。敗者たちは消え去る。彼らは虚無である。¹¹

シモーヌ・ヴェーユは、歴史家たちが資料のもつ特殊な性格に注意を払うことなく、敗者の立場を無視してしまうことを、表面上合理的なだけだと断言する。彼女にとって真に合理的なのは、資料を前にひたすら注意を集中させ、行間の意味を読み取ることで敗者の立場を少しでも明るみに出すことである。彼女は、歴史家たちがこうした努力を怠り、進歩の名のもとにこの歴史の非情性を認め、時間的に隔った暴力行為や残虐さに、無感覚になってしまう傾向をきびしく批判する。彼女にとってそのいい例は、今日の多くの歴史家たちがヒトラーの野心を気違い沙汰だとしながら、大帝国建設のため、多くの罪なき人々を殺戮したローマ人を、文明の伝達者として賛美していることである。彼女は、歴史家のもつこうした傾向のため、偉大さの観念がゆがめられることになったと批判する。過去の残酷さに対し寛容の精神でもって解釈された歴史の世界は、偉大さと権力あるいは集团的威信との結びつきを、暗黙のうちにわれわれに認めさせるからである。そこからさらに彼女は、こうした歴史は真の偉大さを隠すだけでなく、偉大な人物になるため世界征覇の野望に燃えるヒトラーのような精神を育てることに加担しているのだ、と言うに至る。そしてその原因は、歴史家が注意深い知性により、資料を通して正義や愛の精神が輝いている行為を見抜くことを怠っているからであり、権力や集团的威信とは別の偉大さを、はっきり提示し得ないからである。

以上のようにシモーヌ・ヴェーユは、科学や歴史の批判的検討を通して、近代の学問に特徴的な傾向とそれがもたらした精神的混乱を明らかにした。すなわち、合理性の名のも

とに認識と道徳とを切り離してしまう傾向と、そのために物質的な力に権威を与える価値観や世界観が作り出され、人間の内的希求や思惟の能力が危機に瀕することになったことである。だが彼女にとってこの合理性は、真の合理性だとは考えられない。そこで、本来時空に生起する現象を通して真実を認識して、人間の内的希求に答えるはずであった学問、特に科学が、人間の自由をおびやかす側にまわってしまった理由を追求する。その結果彼女は、科学に現われている見せかけの合理性が、真理を求める精神の衰弱によって生じたのではないかと推察したのであり、その点を究明するため、真理の精神の源泉であるべき宗教について次第に関心を持ち、考察するようになる。

注

- 1) それぞれ `devoir`, `vouloir` ou `volonté`.
- 2) S. Weil, *Oppression et liberté* p.155, Gallimard, 1967.
- 3) S. Pétrement, *La vie de Simone Weil*, p.81, Arthème Fayard, 1973.
- 4) 卒論題目: Science et perception dans Descartes
- 5) 現代科学に対する疑問:
Sur la science, p.105—107, Gallimard, 1966.
 デカルトに対する批判的見方:
Ibid., p.111—114;
La condition ouvrière, p.122, Gallimard, 1966.
 現代科学に対する批判的な見方は、その他《Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale》にも見られる。
- 6) S. Weil, *Sur la science*, p.133—134.
- 7) S. Weil, *L'enracinement*, p.206—207, Gallimard, 1963.
- 8) *Ibid.*, p.204.
- 9) S. Weil, *Ecrits historiques et politiques*, p.256—272.
- 10) S. Weil, *L'enracinement*, p.192.
- 11) *Ibid.*, p.189.